

第7回 新鋭俳句賞
候補作品集

2023. 10

公益社団法人 俳人協会

第7回「新鋭俳句賞」候補者一覧 2023.10.22

番号	題	俳号	所属結社	会員非会員	男女	年齢	都道府県
11	けむり	若杉 朋哉	なし	会員	男	48	埼玉県
14	ふりがな	草子洗	田	会員	女	48	大分県
20	掌中	平野 山斗士	田	会員	男	41	東京都
25	吹かれても	森 雅紀	ひいらぎ	会員	男	46	静岡県
32	色ある景色	吉田 哲二	阿吶	会員	男	43	東京都
45	時の闇 (とやのやみ)	塚本 櫻魚	蒼海	会員	男	23	茨城県
56	雀の子	高勢 祥子	街	会員	女	46	神奈川県
63	三面鏡	常原 拓	秋草	非会員	男	43	兵庫県
69	名前	黒川 梓	なし	非会員	女	39	東京都
73	無題	六車 佳奈	風土	非会員	女	38	群馬県
81	舵を取る	稲畑 航平	知音 いつき組	非会員	男	40	秋田県
84	楔	織田 亮太郎	銀化	会員	男	35	新潟県

第7回 新鋭俳句賞 候補作品集

【目次】

作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとしてあります。

受付番号	題	頁
11	けむり	2
14	ふりがな	3
20	掌中	4
25	吹かれても	5
32	色ある景色	6
45	時の闇(とやのやみ)	7
56	雀の子	8
63	三面鏡	9
69	名前	10
73	無題	11
81	舵を取る	12
84	楔	13

- 1 風来ては走るくぼみや春の水
- 2 早春の入江の蟹は小さくて
- 3 春焚火煙少なくなりて消ゆ
- 4 雛あられ揺すれば色の出て来たる
- 5 埃立つところ上がる蝶々かな
- 6 こぼれたるちりめんじやこや目のそぞろ
- 7 しやぼん玉空を弾んでゆくところ
- 8 砂にまみれし防風の摘み残し
- 9 万緑の中の日ざしの生きてをり
- 10 竹落葉回りながらにして迅し
- 11 日当れる枇杷の袋は新聞紙
- 12 強さうに日焼してゐる子供かな
- 13 打水に上がる埃は少しきり
- 14 一つ来て二つとなりぬ蠅親し
- 15 網戸から向ふの網戸見えてをり
- 16 テキサスの土産といふは夏帽子
- 17 野次る口西瓜の種を飛ばす口
- 18 枝豆に大きな塩のついてゐし
- 19 秋風のはじめと思ふ風の中
- 20 とりどりに草の実ありて皆小さし
- 21 秋日和山に大声出してをり
- 22 二つ鳴く虫の遠くの方止みて
- 23 短日やもの白つぼく青つぼく
- 24 冬田道曲がるところの見えてゐて
- 25 舞うてゐし落葉はもとの日だまりに
- 26 少しずつくべて昼より長焚火
- 27 焼箸を割つて煙のやうに湯気
- 28 炬燵よりふやけて外に出てゐたり
- 29 クリスマスツリーよろよろ運ばれ来
- 30 少し出て日向ぼこりをして入る

- 1 大空の遠のいてゆく野焼かな
 2 春愁のため息やがて深呼吸
 3 伝言が畑を通る木の芽時
 4 後ろにも母のこでまりあふれけり
 5 新しき客船と会ふ鳥の恋
 6 自転車のかごが風切る清和かな
 7 たけのこを掘りあててゐる誕生日
 8 走馬灯仮面ライダー駆けつづけ
 9 父の日の皿にペガサス飛びにけり
 10 地球儀とおなじ大きき夏の月
 11 をとこひとり香水の香に埋もれさす
 12 あめんぼへかがみ水輪も傘の中
 13 冷酒を啜りてよりの休暇かな
 14 打水の触れゆく一会ありにけり
 15 緘の字をぴりりと開く扇風機
 16 フルートの音にはじまる夕涼み
 17 出会ふ鳥みな眼白なる一日かな
 18 ふりがなに心やすらぐ葛の花
 19 蠨螂が飛ぶきらきらとひらひらと
 20 産みたての卵と歩む秋日傘
 21 走り蕎麦師弟の距離に変はりなく
 22 噴煙に雨阿蘇山に秋の雨
 23 秋晴や地図をひろげる指二本
 24 腰の鈴きれいにひびくきのこ狩
 25 口紅が紅茶としやべる秋日和
 26 戻る家変はる旅なり柚子実る
 27 ちからこぶ見せて注連縄作りかな
 28 北風の僧侶を運ぶスクーター
 29 友のまま手袋のまま手を繋ぎ
 30 遠山の透きとほるまで氷柱かな

- 1 紫陽花をもて固めたる街の角
- 2 真昼間の昏がり枇杷のほのあかり
- 3 一行の皆触れてゆく蛇莓
- 4 箱庭や午後の日脚のしみわたり
- 5 復元の古墳を孜孜と草刈機
- 6 味爽の草を素足に踏み進む
- 7 浜砂に生ひ葉耳の退屈す
- 8 炎天下一本道をはぐれけり
- 9 天上に雲の畝あり処暑の村
- 10 颱風に飛沫く大道跨ぎ越す
- 11 馬鈴薯の粗金めける重さかな
- 12 昼の虫右も左も阿弥陀仏
- 13 島青み雲青み鳥渡るなり
- 14 人外の地なる蔓梅擬かな
- 15 逆光に炎立つべし冬紅葉
- 16 山茶花のましるに地の面よごすなり
- 17 棒一本友に涸川渡りけり
- 18 北風や威しの凧が畑の上
- 19 三枚の大皿を据ゑ年忘
- 20 又一つ電球切れて二日なり
- 21 潮騒を見詰め水仙暮れ残る
- 22 道知らず立春に突き当りけり
- 23 げんげ田を深深と割る轍かな
- 24 あたたかや洗車の飛沫頬に来る
- 25 なかぞらを星屑のごと飛花過ぎぬ
- 26 一房の落花の抓みごころかな
- 27 清明や蘇鉄ゆたかに安房の国
- 28 走り根の踏まれ踏まれて風光る
- 29 遙か来ていま鶯の聴きどころ
- 30 掌中の石と別れぬ春の湖

吹かれても

- 1 万葉の字余りゆたか梅の花
 2 朝食の声に張りあり受験生
 3 手を上げしのみの出立受験生
 4 卒業歌ピアノも翼広げけり
 5 石鹼玉顧みられぬ高さまで
 6 薬も墓標も所狭きかな
 7 尾根に退くときも急がず春の雲
 8 筥の切先かくもやはらかき
 9 青梅雨や髭剃るときは息止めて
 10 書斎まで近づいてくる素足かな
 11 大方は死者の書物や梅雨深し
 12 解体の三和土を打てる夕立かな
 13 杭にシヤツかけて裸の仁王立ち
 14 吹かれても吹かれても木へ夏の蝶
 15 睡蓮に落ちかねてゐる羽毛かな
 16 雨音を立てぬ朽木や今朝の秋
 17 一雨に萎れし造花秋祭
 18 住み込んで学ぶ異国語青蜜柑
 19 つままれてうりざね顔の蟋蟀かな
 20 思ひ出すかに蜻蛉の折り返す
 21 墓地の名で呼ぶ公園や秋の風
 22 次郎柿家紋のごとき帯広げ
 23 オルゴール館の時報や秋惜む
 24 脇締めて枯蠨螂の対峙かな
 25 大玻璃に出口なき空冬の蜂
 26 まだ形あるものの脚煤払
 27 ちぢこまる句帳の文字や大寒波
 28 マスクして雪女郎とは思はれず
 29 寒鯉や漣に雲揺れどほし
 30 流れゆくままに紅失せ冬の雲

- 1 立春の大きく騰がる馬の脚
- 2 点されて法灯となる春の宵
- 3 番虻とまりて笹の葉を揺らす
- 4 春の鴨一羽来一羽遠ざかり
- 5 クローバーの中に拭きたる泥の靴
- 6 焼印を最後に押して巣箱成る
- 7 毛刈られし羊のたまるひとところ
- 8 盃の縁の薄さよ遅桜
- 9 包帯を取り替ふる間の夕立かな
- 10 百合置いて卓の重心傾きぬ
- 11 蛞蝓や舌のごとくに供花濡れ
- 12 後朝の夏掛そつけないき温み
- 13 暑気払ひジョッキの取つ手頼もしき
- 14 晩夏光浴びて牛馬の輝ける
- 15 一生を踊り通しし鼻緒かな
- 16 唇をめり込ませ桃喰ひにけり
- 17 椋鳥の群うねりて次の木を閲す
- 18 曼珠沙華重なり合うて疎なりけり
- 19 かはらけを投げて仕舞ひや村祭
- 20 こだまして秋天暮色鳶の浜
- 21 家並みは小祠に途切れ石落の花
- 22 釣り銭は前掛けの中八手咲く
- 23 掌に乗せれば河豚は山睨み
- 24 冬の蚊を潰して点にして捨つる
- 25 どの鳩も冬日に遊び脚真つ赤
- 26 長靴の中の寒さへ足を入れる
- 27 毘掛けし手を一心に洗ひけり
- 28 凍鯉の目線合はせぬやうに群る
- 29 領きて耳袋また着くるなり
- 30 都鳥色ある景色ここで尽く

- 1 動かざる辻占のゐて夕立来る
- 2 南風に干す寝袋や火の匂ふ
- 3 藻の花や湖のおもてを遅く流る
- 4 水練のこゑ火葬場の裏手より
- 5 街灼くる点字に影のありにけり
- 6 だれひとり降りぬ駅あり遠花火
- 7 電柱の明滅しるし案山子佇つ
- 8 工場のぼけつと建ちぬ踊の夜
- 9 燈籠の列ぶる橋の辰めきぬ
- 10 庭隅に散髪のと虫の声
- 11 薄穂やしどろの風の馴れなれし
- 12 身に沁むやヒポポタマスの眼の小さ
- 13 瞬きに活字のだれる狗尾草
- 14 白風に妖言をくちうつす
- 15 読みきれぬ駅広告や台風圏
- 16 地上絵のごと秋雲をみてをりぬ
- 17 退色の木々黒々と鳥渡る
- 18 涸れ井戸は大口をあけ叢時雨
- 19 狛る休みして冬山に樵る音
- 20 休学の机つめたき紙あふれ
- 21 寒泉やこのひだまりを解きたし
- 22 棹石にうすき氷のおとずれぬ
- 23 耕や岩にもどれる石碑あり
- 24 どつぷりと見得切るとき春の山
- 25 ふらここや交互に空を滑りおち
- 26 薬や龍の涎で洗ふ銭
- 27 痒きほど蜂蜜あまし春の闇
- 28 新道の橋に名の付くいぬめぐり
- 29 トネルに幾重の時報花の雨
- 30 暮の春おもき闇ある堦の奥

- 1 梅雨明けの掌に乗る達磨かな
- 2 洗ひたる髪を鎖骨の辺に絞る
- 3 接点を窪ませてゐる水馬
- 4 額の花一枚づつが胸鰭に
- 5 白鷺の脚二等辺三角形
- 6 椰子の木と並ぶ高さに鯉幟
- 7 暗幕を引くとかなぶん付いて来し
- 8 ガスタンクに振ぢれし梯子麦の秋
- 9 夏休み蕎麦屋に父を問詰めて
- 10 手花火の先や背鰭の浮かびゐる
- 11 新涼や顔を描くに十字から
- 12 観音も熊も彫りし刃涼新た
- 13 露草の小さき鎌首擡げゐる
- 14 首都高の灯火づたひに秋時雨
- 15 流星に帰巢本能ある如し
- 16 踏切が下りれば遅刻冬堇
- 17 冬帽の一行セルフうどん店
- 18 パエリアは花のやうなり冬灯
- 19 次次と大縄飛を出で来たる
- 20 春雨や出勤までのルーティーン
- 21 硝子戸にテープ一本春の虹
- 22 春宵や塩茹で肉の薄紅
- 23 途中から絵巻に入りぬ雀の子
- 24 鼻先の春蚊追ひやる空気ごと
- 25 山藤の径や厩舎へ突き当る
- 26 根付ほど小さき蛙を指先に
- 27 ピカソ館囲む木の芽の沸沸と
- 28 苜蓿の湿りを肘に身を起こす
- 29 二重唱浜昼顔の間より
- 30 国道を潜りて夏の浜に出づ

- 1 立像は手から滅びぬ夏の蝶
- 2 百合の首もたげて筑摩文庫かな
- 3 草刈女草のほひを脱ぎにけり
- 4 とうすみや三角に折る廁紙
- 5 古き書によき値つきたり氷水
- 6 夏雲と思ふかたちになりけり
- 7 馬冷す天文台のよく見えて
- 8 遠雷の三面鏡にとどきをり
- 9 一枝より夜のはじまる百日紅
- 10 無花果にとぎれとぎれの眠りかな
- 11 おほかたは矩形の蓄龍彦忌
- 12 秋日傘みぢかき橋をくぐりをり
- 13 秋風や横向く指名手配犯
- 14 文士みなよき髭をもつ烏瓜
- 15 しまはれて案山子のうへの案山子かな
- 16 ことごとく譜面よごして秋収
- 17 牛カツの赤き断面浮寝鳥
- 18 一斉に鳩は左へ七五三
- 19 大根干す縁に伏せある罪と罰
- 20 切干や学生服の丈詰めて
- 21 読めぬ本読まぬ本あり冬の水
- 22 ひと跳ねのあと凍鶴となりけり
- 23 川魚を甘く煮てをる霰かな
- 24 卒業のカーブミラーに大き鳥
- 25 一本は長き雨傘紫木蓮
- 26 じゃんけんはグーではじまる春田道
- 27 唾吐きし少年兵の青き踏む
- 28 喪の家に届く鮓桶養花天
- 29 貝寄風に回す金庫の数字かな
- 30 花冷の南京錠を閉ぢにけり

- 1 過ぎながら傘の傾く二月かな
 2 むつごとのやう鶯をまね合へば
 3 風船のゴムの苦きを愛しめり
 4 マヨネーズみるみる春キャベツ汚す
 5 たんぽぽに顔の平たき犬坐る
 6 剪定の音ばかりにて見えぬ人
 7 ばら園の薔薇ことごとく女の名
 8 父の日の耳うらがへす遊びかな
 9 からつゆや音なく月を歩む人
 10 短夜の貝やはらかに砂を食む
 11 たまさかに幌は揺れゐて串の鮎
 12 涼しさや川の名の断つ等高線
 13 石ひとつ据ゑ箱庭のよるべなき
 14 ときどきは生者の声す夏館
 15 本壘を遠く睨みて裸なる
 16 晩夏光犬ずんと水へ入る
 17 盆東風や辣油数滴触れ浮く酔
 18 花木権いみじき関が壁隣
 19 齒の傍に檸檬あかるく掲げたる
 20 梨齧りつつ隅つこの下戸である
 21 いちじくのさみしき鳥の形かな
 22 はつしぐれ都こんぶの薄ら甘
 23 短日や指葉して神田駅
 24 鯛焼のちよつと呉れよが斯程とは
 25 吾の抱く葱を車中の誰も嗅ぐ
 26 二三人跨ぎ蜜柑の箱浚ふ
 27 火を慕ひ火を飽きそめて焚火果つ
 28 ひげ少し描かれ降誕劇へ立つ
 29 息白しかりそめの名に猫を呼び
 30 河映すカメラに雪の当る音

- 1 はつなつの船首の影は波のなか
- 2 船底を波突き上ぐる帰省かな
- 3 船窓に島の若葉のせまりくる
- 4 夏の潮押し寄せてゐる防波堤
- 5 自転車を巖にもたせ夏怒濤
- 6 思春期の沖へ沖へと泳ぎゆく
- 7 潮風に髪乾かしつ実梅食ふ
- 8 先生の通ひくる島花蜜柑
- 9 氷水いづれは島を離るる子
- 10 十人のための校庭花梯梧
- 11 穴子裂く島の子の眼にかこまれて
- 12 夏つばめ高きところに鳥役場
- 13 橋脚に潮ぶつかつて花海桐
- 14 峰雲へ白波たてて救急艇
- 15 夕風や砂利満載のガット船
- 16 南風吹く島に一礼研修医
- 17 十五より島を離れて夕螢
- 18 ほうたるのひかりのどこか濡れてゐる
- 19 螢火の這ひまはりゐるたなごころ
- 20 夏暁の漁港につどふ女たち
- 21 鍋に脚あまる大蛸茹でてをり
- 22 割烹着に皺ひとつなし祭まへ
- 23 ゐぬはずの父あらはるる祭鱧
- 24 潮満ちて星さわぎだす宵祭
- 25 薬売の宿下駄に来る祭かな
- 26 峰雲へ湯立の榊弧を描き
- 27 形代てふはかなきものを胸に撫で
- 28 甘酒につぎつぎ並び祭笛
- 29 にぎはひの短き島の夜店かな
- 30 夜光虫ふたたび闇のめぐりくる

舵を取る

- 1 見てゐてと言はれ見てゐる春遊
- 2 タグ切つてあげる四月の鉢かな
- 3 名前には菜の花の菜を入れようか
- 4 春潮や大まかに説く地動説
- 5 雲梯は虹立つかたち夏来る
- 6 口よりも大きく掬ふかき氷
- 7 水馬の脚に古池押すちから
- 8 弄られて固く仰け反る大蚯蚓
- 9 山羊の瞳の細き水平やませ来ぬ
- 10 飛び立てば二本の糸蜻蛉となりぬ
- 11 蟬生る夜によく磨く永久菌
- 12 景品で景品を指す夜店かな
- 13 薄闇にカットグラスを見失ふ
- 14 急かされてゐる玄関の水着子に
- 15 隕石の落ちゆく挿絵八月来
- 16 亀虫の白熱灯へ当たる音
- 17 委員らに異議無し背高泡立草
- 18 賢治忌の遙かに昏き地球影
- 19 秋晴の遊具の船の舵を取る
- 20 祈りから運動会の始まりぬ
- 21 初雪のことばかり書く手紙かな
- 22 冬晴へ振り抜く小さきドライバー
- 23 占ひの通りにポインセチア買ふ
- 24 ねんねこや男に乳の出ぬ乳首
- 25 スキー帽脱ぎてやさしき親となる
- 26 空瓶のラベルの貴族春の浜
- 27 子の前の枝垂桜を除けてやる
- 28 恋多き画家の自画像春の汗
- 29 眠る子とひゝなの客となりにけり
- 30 ふらこゝをもつとくと言はれつゝ

- 1 山頂の残り雪より夜の明くる
- 2 飛花落花竜に翼の在りし頃
- 3 有限の時間に石鹼玉溢す
- 4 卒業に立て掛けておく竹刀かな
- 5 風葬の瞳に鳥の帰り行く
- 6 師の流儀伝ふ足先下萌ゆる
- 7 耕して来世は土に生まれたし
- 8 神隠し在りし辺りを草むしり
- 9 嘶けるものも加はる田植歌
- 10 翡翠の光突き刺しては放す
- 11 歩き疲れて雲海の王に侍す
- 12 彷徨の民の夜へと火取虫
- 13 根の国の人肌ほどの冷し酒
- 14 隣人の夢の中なる水中花
- 15 学僧の足裏を愛でる草の花
- 16 大道へ続く徑に盆の月
- 17 隧道を抜けて終戦日の暮るる
- 18 夭折の星の零れて竜胆に
- 19 語らざる身の上重くして踊る
- 20 筆跡を頼りに夜なべしてをりぬ
- 21 家族とふ楔の上に打つ砧
- 22 連山の最敬礼に神の旅
- 23 海氷も賢者の背も瘦せにけり
- 24 生老病死を絡げて神楽とす
- 25 誰が為の正義でも無く冬薔薇
- 26 持ち主の亡き猟銃の冷えてをり
- 27 理想郷までの道のり息白し
- 28 九天も九地も捨てし帰り花
- 29 非常食数へ直して年の逝く
- 30 山祇に子の生まれたる水温む